

第1図 上人ヶ平遺跡の位置



第2図 空中写真



第3図 木津平野と上人ヶ平遺跡

上人ヶ平遺跡

はじめに 上人ヶ平遺跡は、京都府の南端、奈良県境に近い相楽郡木津町の市坂地区に所在する。遺跡がある台地は、ほぼ平坦で海拔55mを測り、北西の水田との比高差は、約15mである。この遺跡の調査は、昭和59年度に始まり、3次にわたる試掘の後、昭和63年度・平成元年度の全面調査の結果、遺跡の全容がほぼ解明された。

弥生～古墳時代の村と墓 上人ヶ平の地に初めて人々の営みが確かめられるのは、この台地の先端近くで検出された弥生時代後期後半の竪穴式住居跡で、高地性集落の一部ととらえることもできよう。

ついで、古墳時代の初頭(庄内式併行期)には、方形及び円形に溝を巡らせる墓と見られる遺構がある。

古墳時代前半期(布留式併行期)は、集落の時代である。14基の竪穴式住居跡と倉庫と見られる3棟の掘立柱建物、この台地上でかなりの間隔を置いて、東群と西群に分かれているようである。両群の間には、土壌墓も検出されている。

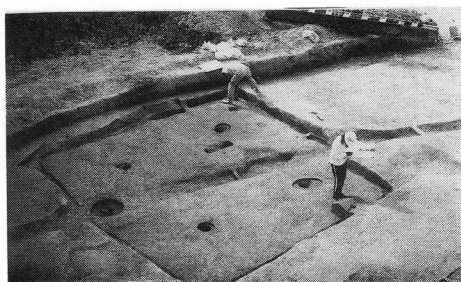
上人ヶ平の古墳群と埴輪窯 古墳時代の中期中頃、この台地は集落から古墳の造営地に変わる。現在確認している19基(内2基は未調査)の中で最初に築かれた古墳は、上人ヶ平古墳群中で最大の規模(径25m)をもつ造出し付き円墳の5号墳である。範囲

確認の試掘で、段築・葺石・埴輪および周濠と外堤の存在を確認している。

5世紀の後半期、この5号墳の周囲に方墳群が営まれる。現在7基確認しているこれらの古墳は、最大の8号墳で一辺13m程度、最小の16号墳では、6.5mと小規模なものだが、いずれも埴輪、しかも形象埴輪を樹立していた点に特徴がある。5号墳も含め、出土した埴輪類には、円筒・朝顔のほか、家・蓋・盾・鞆・鶏・馬などの形象埴輪があり、とりわけ、家・蓋・馬には全形のわかるものがある。

この古墳群の調査中、5号墳のおよそ100m東の地点で、埴輪窯が3基発見された。調査を行った1号窯は、地下式の無段・無階の窖窯で、煙道部・焼成部・燃焼部からなる窯体の検出全長は斜距離で8.0m、幅1.45mを測る。床面は3次分あり、第3次床面からは、円筒埴輪・家形埴輪などが出土した。これらの埴輪は上人ヶ平古墳群の14・15号墳、また灰原から出土した埴輪は同じく16・17号墳のそれに酷似することから、埴輪の生産地と供給先が同一の丘陵上にあっただと言えよう。

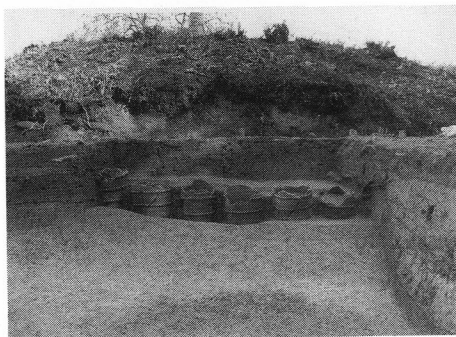
古墳時代後期になると、古墳群はこの台地の先端部周辺に移動する。ここでは、墳丘が残る1基(1号墳)、あるいは(未調査の2・3号墳を含めて)3基の円墳と、発掘調査によって初めて検出された6基の小型方墳が一群を成している。埴輪の存在は、1号墳で確認されている。上人ヶ平古墳群は、上述した中期後半の南群と後期前半の



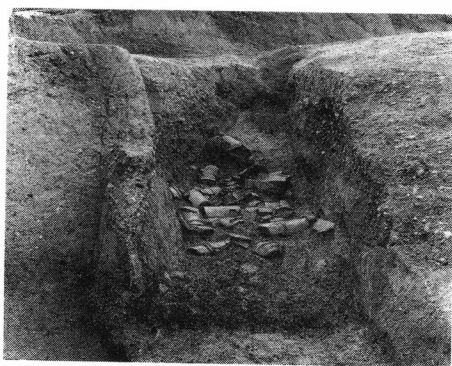
第5図 上人ヶ平5号墳



第6図 5号墳の円筒埴輪列



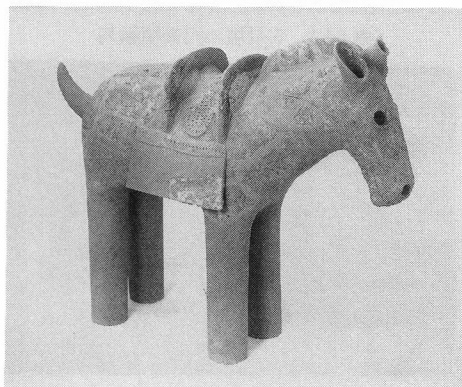
第7図 8号墳(左)と16号墳(右)



第8図 上人ヶ平1号埴輪窯



第9図 蓋形埴輪



第10図 馬形埴輪

北群の他に、両者の中間に位置する円墳1基と方墳1基を加えると、円墳5基・方墳14基から成る中期中頃から後期前半にかけての古墳群である。周辺古墳と関連させるならば、数百m北の瓦谷古墳(前期後半)、数百m東の幣羅坂古墳(中期前半)に続いて営まれたのがこの上人ヶ平古墳群で、数km南の、佐紀盾列古墳群の出現がこれらの古墳の築造に関係していたことが、単に地理的な近さのみならず、埴輪等の遺物の検討によっても導き出されている。

奈良時代の掘立柱建物群 古墳時代も数世代のかなたに去り、木津の地は、平城の都の外港泉津として賑わっていた。同時に、平城京の北の各地には、都という一大消費地に供給する須恵器や瓦を焼く窯が営まれていた。上人ヶ平に再び人の姿が見られるのは、この奈良時代の中頃である。

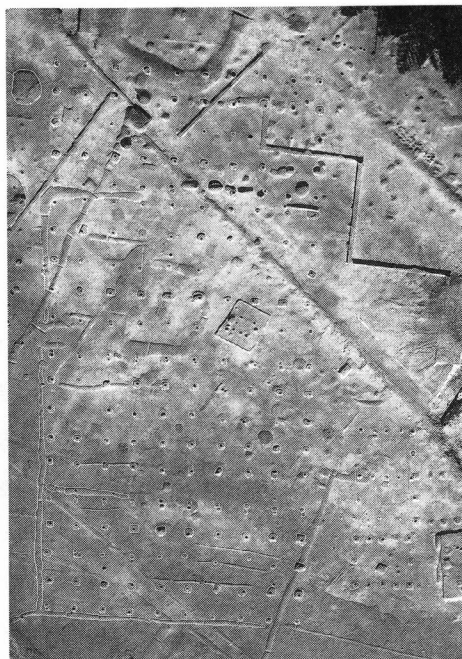
上人ヶ平遺跡の奈良時代の遺構は、整然と配置された11棟からなる掘立柱建物群と、それに付随する溝・土坑・井戸などである。建物群は、便宜上、中央の大規模なA群、東のB群、西のC群の3群に分けられる。A群は4棟の東西棟が南北に整然と並び、あたかもひとつの広大な建物空間(約1,350m²)を構成しているかのようである。個々の建物は、9間×2間の身舎に南北両面庇がつく。柱間は約2.9mで、東西約26m、南北11.5mという大型の建物である。B群は、2間×3間を基本とし、南北棟4棟と東西棟1棟の5棟からなる小型の建物群である。C群は、3棟の建物群(2

間×4間)で構成される。

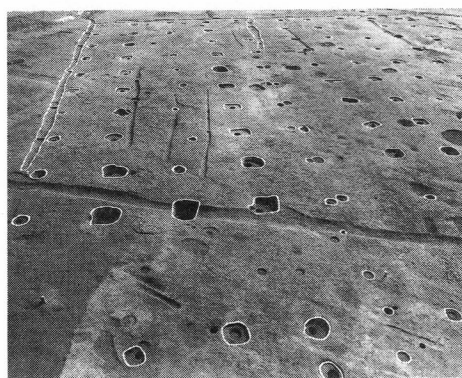
出土遺物の大半は、瓦類である。軒丸瓦には、平城宮6133A・B・C・6130B・6235Mがあり、軒平瓦には、6732A・C・6725B・6718Aなどがあり、また、鬼瓦は平城宮IV式Bである。土師器・須恵器は、奈良時代後半のものであり、土坑から出土した銅銭の中に萬年通宝と神功開宝がある。

上人ヶ平遺跡の奈良時代の遺構の性格については、瓦生産の一連の工程を復原できる官営瓦工場跡と評価できる。建物群の南方には土取りに起因すると思われる池があり、その手前のいくつかの古墳の周濠は、この時期に改修され、貯水地や土打ちの場とされ、広大なA群建物の中では、主としてなま瓦の成形・調整と、その乾燥が行われていたと見られる。また、B群は倉庫、C群は井戸の存在や土器の一括出土から工人集団の食生活に関連した施設との説が出されている。瓦の焼成は、この台地の南西斜面(A群建物から約30m)にある市坂瓦窯(未調査)でなされ、その後、焼成された瓦はもう一度台地に持ち運ばれ、製品検査を受けていたらしい。出土した遺物から、この瓦工場は、操業が8世紀後半の比較的短い期間に特定できる。また、軒瓦の同範関係から、天平17(745)年の聖武天皇の平城還都以降の大改修の時期に、主として大膳職の屋瓦生産の為の官営工場といえる。

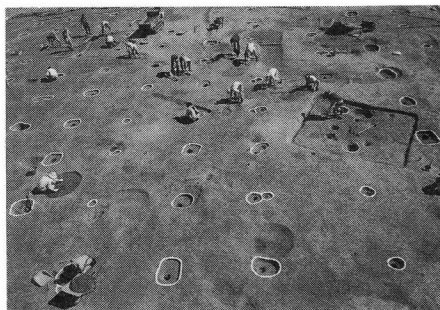
(小山雅人・石尾政信)



第11図 掘立柱建物群 A



第12図 掘立柱建物群 A



第13図 作業風景